

# 子ども新聞取材した 記者たち



名古屋市立  
西城小学校6年  
根本悠里さん



江南市立  
古知野西小学校6年  
横井結梨さん



あま市立  
基目寺小学校6年  
横井彩花さん



蒲郡市立  
西浦小学校6年  
鈴木悠太くん



岡崎市立  
緑丘小学校6年  
吉田敢紀くん



刈谷市立  
小垣江小学校6年  
高木友里さん



豊田市立  
寺部小学校6年  
浅野颯良くん



羽島市立  
小籠小学校6年  
谷山愛梨さん



岐阜市立  
常盤小学校6年  
土田章雅くん



津市立  
栗真小学校6年  
土保篤樹くん



津市立  
一身田小学校6年  
立藤すみれさん

## 「持続力」のある取り組み

「北海道に大きな地震がくるなんて」。子ども記者たちは、何度もこの言葉を耳にした。いつ、何によって、どのような被害にあうかわからない。それが災害である。そのことを痛感したのではない。

この地震で最も多くの人命を奪ったのは、建物の倒壊ではなく、地すべりであった。厚真町吉野地区では、集落の背後にあった斜面が大規模に滑り、住民34名中19名が犠牲になった。札幌市清田地区では、足元の地盤が液状化に伴い流動化し、多数の家屋が被災した。死者はでなかったものの、住宅再建は大きな課題である。さらに、北海道全域が停電したブラックアウトも多くの人の暮らしや産業に被害をもたらした。

子ども記者たちは、不意を突かれる形で被災し

た北海道で、これが役にたったという話をたくさん聞きだしてくれた。いずれも地震対策ではない。しかし、だからこそ「持続力」のある取り組みであるとも言える。たとえば、北海道ではジンギスカンが食文化として根づいており、休日にバーベキューを楽しむ家庭が多い。地震のあと、停電した冷蔵庫にあった食材を持ち寄りて屋外で食事をする人々の姿が多く見られたという。また、冬季の停電にそなえて発電機を持っている家庭も少なくないようだ。

災害対策は、それが災害発生時に継続されていなければ何の意味もない。今回の取材で「本震の半年後に震度6弱の余震が発生したときには、すでに水を備蓄しなくなっていた」という話があった。継続の困難さを無視した災害対策は現実的ではないということを再認識した。

ほかの地域で発生した災害がきっかけになってしまった「持続力」のある取り組みが北海道でいくつも確認された。金川牧場では東日本大震災をきっかけに導入した非常用発電機が役だった。法城寺住職の舛田氏の多岐にわたる震災後の活動も東日本大震災が契機だった。北海道胆振東部地震がきっかけになって、東海地域に「持続力」のある取り組みがいくつも生まれることを期待したい。



関西大学 社会安全学部 准教授  
奥村 与志弘氏

1980年生まれ。2008年京都大学大学院修了、博士(情報学)取得。人と防災未来センター(神戸市)を経て、12年に京都大学大学院助教、17年4月より現職。東日本大震災では政府現地対策本部に入ったほか、愛知県田原市の防災会議委員も務める。

## 子ども新聞 読者プレゼント

避難所でベッド・テーブル・イスに早変わりするダンボールセット、株式会社真照の「ミラクルボックス」を抽選で5名様にプレゼントします。郵便番号・住所・電話番号・氏名・学年・(学校、団体の場合は)組織名を書いて、右記までご応募ください。

はがき 〒460-8488 (所在地不要)  
朝日新聞社メディアビジネス部「子ども新聞」係  
Eメール nadv-6@recv.asahi.com  
件名: 朝日新聞社メディアビジネス部「子ども新聞」係  
FAX 052-221-5804  
朝日新聞社メディアビジネス部「子ども新聞」宛

締め切り  
2019年9月30日(月) 必着

※当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。※お送りいただいた個人情報は朝日新聞社でとりまとめ、賞品の発送および個人を特定しないデータとして利用させていただきます。